

赦し合いなさい

村上みか

奨励者紹介〔むらかみ・みか〕

同志社大学キリスト教文化センター所長

同志社大学神学部教授

〔研究テーマ〕近世キリスト教史、宗教改革

だから、偽りを捨て、それぞれ隣人に対して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです。怒ることがあっても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒ったままでいてはいけません。悪魔にすきを与えてはなりません。盗みを働いていた者は、今からは盗んではいけません。むしろ、労苦して自分の手で正当な収入を得、困っている人々に分け与えるようにしなさい。悪い言葉を一切口にしてはなりません。ただ、聞く人に恵みが与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を、必要に応じて語りなさい。神の聖霊を悲しませてはいけません。あなたがたは、聖霊により、贖いの日に対して保証されているのです。無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。

（エフェソの信徒への手紙 4章 25—32 節）

新しい年度が始まりました。今年度からはキャンパス内での新入生歓迎の行事も復活し、学内に学生があふれていることが、本当にうれしく感じられます。まだ完全な形ではありませんが、気兼ねなく語り、ともに活動することができる有難さを皆さんも感じておられるのではないのでしょうか。自由に動き、自由に人々と関わることのできる幸いを、私たちは感謝をもって受け止め、その時その時を、大切に過ごすことができますよう、願っています。

この3年間、私たちは活動を制限される生活を余儀なくされてきました。皆さんはこの制約の多い、大変な時期をどのように過ごされたのでしょうか。それぞれに、それを克服する、あるいはやり過ごす方法を見出されたのではないのでしょうか。この3年間に私たちが培った時の過ごし方、あるいはそれを見出そうと模索した経験は、これからも、私たちが困難に陥った時に、きっと大きな助けになるように思います。

私は、家にこもることが多い生活の中で、音楽をたくさん聴きました。私はクラシック音楽が好きなのですが、YouTubeでは著作権が切れた昔の名演が多く上げられていて、かつては簡単に手に入らなかった素晴らしい演奏を、次から次へと、漁るように聴きました。

特によく聴いたのが、お気に入りのピアニスト、タチアナ・ニコラーエワ（1924—1993）の演奏です。彼女はロシアの人で、バッハの演奏家として有名なピアニストです。しかし彼女が世界的に知られるようになったのは、ソビエト連邦が崩壊してからでした。その後、彼女は世界各地で演奏活動を行い、日本にも来ましたが、その数年後に亡くなりましたので、日本ではそれほどには知られていないようです。

その彼女の弾くピアノは、コロナ禍の閉塞的な、混とんとした毎日に、明るさと力を与えてくれました。演

奏が上手なピアニストは世界中にたくさんいますが、生きる力を与えてくれる演奏はそんなに多くはないように思います。ニコラーエワの演奏は、美しく、温かく、そして秘めた強さを持ち、このような素晴らしい演奏がこの世にあるのか、これが聴けただけで生きていてよかった、と神様に感謝したくなるほどのものでした。この大変な現実から別の世界に連れて行ってくれる、天上の音楽、天国を感じさせるような音楽、と行ってよいかもしれません。

人間には、こんなに素晴らしいことができるのか、そのように感嘆することが、皆さんもあると思います。先日のWBCでの日本人選手たちの活躍は、まさにそのような気持ちにさせてくれるものでした。日々、努力を重ねて、世界の舞台上でこんなに優れたプレーができるのだと、彼らの活躍は、多くの人に感動と力を与えてくれました。人間のすばらしさを感じさせてくれる営みに、幸いにも、私たちは、いろいろな場面で、そうたびたびではないにしても、会うことができます。

その一方、人間はこんなことをするのか、と思わされることも、私たちの周囲には多々あります。世界では戦争や紛争が絶えることはなく、多くの人々の命が失われ、住んでいる家が破壊され、あるいは迫害を受けて、難民になることを余儀なくされる人々が数多くあります。国連難民高等弁務官事務所によると、昨年はいよいよその数が1億人を超えたそうです。着の身着のまま逃れ、食べるもの、休むところも保証されず、健康が危険にさらされる過酷な生活が強いられます。また子供たちは、教育を受けることも難しい状況にあります。

人々をそのような状況に追いやったのは、同じ人間です。政治的な権力争いにより、あるいは考え方の違いにより、あるいは感情的なところで、人が人を追い詰め、暴力や武力をもって人を傷つけ、生活を破壊し、人を悲しみと苦しみの淵に追いやる、そのようなことを人間は行ってしまうのです。

人間は人に感動を与える素晴らしいことを行える一方、驚くべき残酷な行為を行う存在であるようです。人間というのは両方の可能性を持った、両義的な存在であると言えるでしょう。

先ほどお読みいただいた聖書の箇所にも、そのような人間の両義性が表現されています。人間は良い方にも悪い方にも傾く可能性を持っている。しかし悪い方に傾かず、良い方向へと自分を向かわせるようにと、語りかけられます。

25 節から見ていきますと、まず、隣人に対して(つまり周囲の人々に対して)、偽りを捨てて、真実を語りなさい、と言われます。

26 節では、怒ることがあっても、つまり怒ってしまうことはあるかもしれないけれども、罪を犯してはなりません。そして日が暮れるまで、一日中、怒ったままでいてはいけません、と言われます。

28 節では、盗みを行わず、つまり人から取るのではなく、逆に苦勞して自分で働いて、正当な収入を得て、そこから困っている人達に分け与えなさい、と勧められます。

29 節には、悪い言葉を一切、口にしてはなりません。そうでなくて、聞く人に恵みを与えられるように、その人を造り上げるのに役立つ言葉を語りなさい、とあります。

そして31 節では、無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。そして、憐れみの心で接し、赦し合いなさい、と語られます。

人に対して偽らず、怒らず、盗まず、悪口を言わない。無慈悲にならず、憤らず、わめかず、そのことをしない。そのようなことはせずに、そしてそれとは逆に、真実を語り、自分から分け与え、その人に恵みが与えられる言葉を語り親切にし、憐れみの中で接する、このようなあり方が、勧められているのです。おそらく、多くの人は、もちろんそうできたら素晴らしいことだと思われるでしょう。でも、それがなかなかできない、それが人間の現実なのです。良くなりたくても、なれない、人間はそのようなジレンマの中に生きるものなのです。それでは、どうしたらこのジレンマを脱して、よい方へと向かうことができるのでしょうか。

この聖書の箇所には、そのための様々なヒントが詰まっています。

まず、人間はなぜ悪い方に傾くのか。なぜ偽りを語り、怒り、盗み、悪口を言ってしまうのでしょうか。そのことを考えてみましょう。

27 節にはそのような行為は、悪魔にすきを与えるものである、つまり悪魔に取りつかれてしまうあり方であり、また 31 節では、悪意に満ちたものである、と言われます。なぜ人間は悪魔にすきを与え、悪のとりこになってしまうのでしょうか。

それは自分を守り、自分がよい思いをするためだと言えるでしょう。自分だけを受えようとする、そのような人間の自己中心的な心のありようが、人間を悪意に満ちた行為へと向かわせるようです。偽りを語るのも、怒るのも、盗むのも、悪口を言うことも、いずれも、自分を守るため、自分がよくありたい、という人間の願望が生み出したものだと言えるのではないのでしょうか。皆さんも、怒っている時、なぜ自分がこんなに怒っているのか考えてみてください。悪口を言いそうになった時、なぜ自分は悪口を言おうとしているのか、立ち止まって考えてみてください。きっと、その時の自分の心のありようが見えてくるはずです。

そのような、自分をまず大切に思ってしまう人間が、どうすれば、良い方向へ向かうことができるのでしょうか。どうしたら、真実を語り、分け与え、恵みに満ちた言葉を語り、親切に憐れみの中で接することができるのでしょうか。

そのためのヒントもここに示されています。32 節にはこのように書かれています。「神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい」。

私たちが怒り、悪口を言うときは、自分が正しいと思い、自分を傷つける人に対して、感情的に抵抗しようとしているのでしょう。しかし、冷静に、果たして自分がどれほど正しいのかと考えると、自分も人を非難できるほどの絶対的な正しさは持ち合わせていないことに気づくはず。自分も、同じように人を傷つけ、過ちを犯してしまう存在であることに気が付くこと、これがよい方向へ向かう大きな一歩であるのです。

キリスト教ではこのような人間のありようを「罪」といいます。日本語で「罪」というと、何か犯罪など、大きな過ちを犯した状況をイメージしますが、聖書の言う「罪」というのは、人間が神を離れ、自分が自分の神になってしまうこと、自分のことを優先し、自分だけを受えようとする自己中心的なありようを言います。人間である以上、だれもが持っているものと言えるでしょう。しかし、困ったことに、自己愛が強い人間は、その自分の状況をダメだとは、あまり思わないようです。

その自分を冷静に眺めて、やっぱり良くないな、ダメだな、と思うこと、これがよい方向へ向かう出発点であるのです。なぜなら、その時、その人の心は謙虚になり、このような自分だけれども、人として生きてい

ってよいこと、ダメだけれども、赦されてやり直しができることを知り、それを受け入れることができるからです。そのことを教えたのはイエスでした。

自分が赦され、このままで生きていってよいことを知った人は、誰かに攻撃され、傷つけられ、不都合を被ることになっても、やり返さず、憐れみの心をもって赦することができるようになるのです。赦された人が、人を赦することができるのです。そのような経験を重ねる中で、人は互いに赦し合い、和解し、平和を作り出すことができるのだと思います。

世界でも、私たちの日常生活の中でも、平和を作り出すのは難しいことです。外に向かって、いくら平和を叫んでも、仲良くしましょうと言っても、その実現は難しいと思います。それよりも、まず自分の中に向かって、自分をよく見つめ、自分の現実を知り、謙虚になり、赦すことのできるような心が養われること、これが平和と和解のための、現実的な基盤となると言えるでしょう。そのような人が一人でも多く現れることにより、平和の実現が近づくのだと思います。

皆さんも、ぜひ平和を作り出す存在になっていただきたいと思います。

2023年4月12日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録